霊○新○の献身
1

霊◯新◯の献身　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19589366

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊

最霊です。ですが師匠総受けです。今回は本番無し。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

霊〇新〇の献身　1

「師匠、あんたにはホントにがっかりした。あんたがそんな人だなんて思わなかった」
夕焼けが赤く染める相談所。
「もう２度とここには来ません。アンタなんか大っ嫌いだ」
おかっぱの少年が、明るい髪を斜陽で血の色に染めた青年に言い放つ。
「──そうか」
青年はほっとしたように笑って。
「良かった」
言葉で少年の背中を押した。
「……」
少年は一瞬で壮年の男に姿を変えた。
「やはりこの少年に関わりがあるのか？」
かつて最強の霊能力者だった男は、山吹色の暖かい印象の青年の髪から、さっと血色の夕陽を払う。
「本当はキミが最も傷付く状況のはずだ。何故微笑う？」
青年は今度は困ったように笑って、真っ白になった空間で唯一残されたデスク・チェアーから立ち上がる。
「大人には色々あるんだよ。分かるだろ？最上さんなら」
信念の元、世直しをしてきた大悪霊は顔を歪める。
「分からんな。分からんからこうやってキミに取り憑いている。これは間違ったことだと思っているからだ」
青年は優しく最上を見つめる。
その山吹の瞳は水に濡れた花びらのように透き通っていて。
「なぜこんなことをしている。お前がそうしていることで蔓延る悪があるのが、私には我慢ならないんだ。私に助けを乞え。いますぐそんなところから出して、自由にしてやる」
ふ、と青年は綻ぶように笑って。
「──最上さんは優しいなあ」
最上からは頓珍漢としか思えない言葉をこぼした。

「──なあ、この世界は最上さんの好きにできるんだろう？久しぶりにたこ焼きが食べたいんだ。一緒に食べないか？」
「……」
最上は黙って空中からたこ焼きを出してやる。
「わ、ありがとな」
青年は嬉しそうにほどよく冷めた食べ頃のたこ焼きを口に運ぶ。
「ん、美味しい！最上さんも、ほら」
「……」
あーん、と差し出されたたこ焼きを最上はぱくりと食べた。
美味い、と思う。
最上がこの青年の夢枕に立つようになって、３か月が過ぎていた。
だいぶほだされてしまった、と最上は思う。元来嫌いでは無いのだ、善人は。
（その中でも飛び抜けた阿呆で善人だ、こいつは）
最上は焦れていた。こうしているうちにも時間は無くなっていく。
青年を助けられるタイムリミットは刻一刻と近づいてきている。
「あ、朝だ」
たこ焼きを嬉しそうに食べ終えた青年が光を見て呟く。
「またな、最上さん」
そうして、ふ、と青年は最上の精神世界から消えてしまった。

※

「１６８さん、食事です」
青年が起きて身なりを整えていると、衛生係の青年が弾んだ声をかけてきた。
「ありがとう」
「１６８さん、１６８さんは大学は何処がいいと思いますか？」
こそこそと衛生係は青年に話しかけてくる。本当は規則違反だが、刑務官は知らんぷりをしていた。
「君は何を学びたいんだ？」
「商売を学んで、金持ちになりたいんです」
ふむ、と青年は指を唇に当てる。

「調べておこう」
「はいっ！ありがとうございます」
んん、と刑務官が咳払いをする。
「あー、私語は慎むように」
壮年の刑務官は、棒読みでお決まりの台詞を吐く。
すみません、と衛生係の青年が頭を下げた。
ペコペコリと衛生係と刑務官が青年に礼をするので、青年も深々と礼を返した。
朝食を終えて。
青年は『税理士入門』と書かれた本を読む。先程の衛生係の青年にはこの職業が向いていると思ったから、調べているのだ。
「１６８番、奉仕の時間だ」
「ああ、はい」
パタン、と本を閉じて、青年は運動場に向かう。
運動場の一角に設けられた小さなテーブルの前に青年は座った。
「よう」
見事な和彫が袖から覗く屈強な男が、青年に声をかける。
「ああ」
青年はにっこりと笑った。
「どうぞ、かけて」
ペコリと和彫の男は青年に頭を下げる。
「先生、お願いします」
「うん。今日は分数の掛け算をしましょうか」
微笑む青年は、聖者のごとく穏やかで、犯罪者の中では異質で。

「誰だい、ありゃあ。××組の幹部が頭下げてたが」

新入りが訝しんで近くのスリの老人に訊ねる。
「ああ、霊幻先生か。知らねぇのか？お前さん」
顔に大きな傷がある新入りは首を振る。
「数年前から奉仕ってことで運動の時間に希望者の相談をきいてる。最近はもっぱら勉強を教えてることが多いかな。話してて楽しい人だよ、お前さんも話しかけてみたらいい。最も、先生の手が空

いてたら、の話だが」
霊幻という青年の元には、凶悪犯からチンケな詐欺師まで、色んな犯罪者が次から次に相談に訪れていた。
「そういうことじゃなくてだな……ありゃカタギだろ。なんでこんなところにいるんだ」
ギロ、とぬめったような瞳でスリの老人は新入りを睨みつける。
「みんな信じらんねぇんだよ。先生が犯罪者だなんて。だから、あんまり話したく無いんだ。先生を悪く言った、って掴みかかってくるやつまでいるんだぞ」
「おい、気になるだろ」
そんな言い方をされれば新入りの興味は増すばかりだ。
忌々しそうにスリの老人は舌打ちした。
「……みんな冤罪だって思ってる。だが、刑が確定しちまってる。ニュースぐらい見てねぇのか、小僧」
「焦らすなよジジイ」
はぁ、と今度は老人はため息をついて。
「霊幻先生がやったのはな、コロシだ。３人もの格闘技経験者の男を惨殺したシリアルキラー。それがあそこでヤクザに算数を教えてる男だよ」
新入りは目を見開く。

「あれが確定死刑囚、霊幻新隆だ」

続